

# 強権併合と分離独立の狭間で

新井 宏

いま世界では、独立を求めて「国民投票」を行う地域が数多くある。その中で逆に、内陸的な超大国が、自国に併合した地域を強権で支配しながら、更に軍事力、経済力を背景に、その周辺地域を実効支配しようとする動きが活発である。

最近の独立を求める動きの最大のもの、何と云っても、イギリスの欧州連合EUからの離脱(ブレグジット)を可決した国民投票(2016.6.23)であるが、その他にもスペインのカタルーニア州(バルセロナ)の独立宣言(2017.9.27)、イタリアのベネト州(ヴェネチア)等の大幅な自治権要求(2017.10.23)などが相次いでいる。いずれも海に面し、通商により発展してきた歴史を持つ地域である。この点は後述する。

その他の独立運動としてはクルド族の問題がある。主としてトルコ、イラン、イラク、シリアの国境地帯に住むクルド族(現在約三千万人)は、第一次世界大戦後に独立の構想があったものの一九二三年ローザンヌ条約によって、その居住地が各国に分割されてしまった。そのため、長年にわたる独立運動が続いているが抑圧されてきた。

ところが、イラクの独裁者サダム・フセインが除かれてからは、北部イラクにクルド人自治区(首都アルビル)が認められて力を得て、居住地域にあるキルクーク油田がイスラム国家ISに奪われたのを自らの軍事力で回復するほどになった。油田の収益を独立の原動力にしようとするのは当然の流れであり、独立の是非を問う住民投票では、賛成票が九割を超えた(2017.9.30)。しかしイラク政府はもちろん、イラン、トルコ等は、いずれも国

土の周辺地をクルド族に割譲することなど問題外と拒絶している。その中で、シリアにおけるイスラム国家ISとの戦いに勝利したクルド人もシリア北部の三県を自治区として固め、独立の機会をうかがっている。

内陸国家における領土問題は、海に開かれた国家とは様相が異なる。たとえば、ローマは最初から世界征服を目指していたわけではなかったが、国の防衛を目指してその周辺国を取り込むうちに大帝國になった。内陸的な国家とはその周辺部を勢力圏に取り込む本能がある。

今の中国なども漢民族が住む中華の周辺に、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区を持ち、周辺部総面積は明代の領地(漢民族居住地)に匹敵する。いずれの自治区でも独立運動が盛んであるが、これに香港、台湾を加えれば、中国の周辺部では全て独立運動が起こっているといえよう。

唯一の例外が朝鮮半島であるが、最近中国が朝鮮半島を露骨に属国化しようとしているのを強く感じる。このような周辺地域を確保することによって、中国は国土の安全を維持しているので、中国の国境からインドのニューデリーまでわずか三五〇キロメートルしかないと思うとちょっと驚く。

だから内陸的な超大国は今でも周辺地域への勢力拡張に熱心である。

ロシアはクリミヤをウクライナから分離独立させて併合した上に、東部ウクライナへの影響力を強めている。長年続いているチェチェン問題にも強硬である。そもそもプーチン大統領が出世の糸口をつかんだのがチェチェン紛争の制圧だったのだから無理も無い。日本との関係では、北方領土を本能的に手放さない。

それにも増して、最近中国が朝鮮半島に対して牙をむき出し始めた。

トランプ大統領と習近平主席の最初の首脳会談で、習近平は「朝鮮は中国の一部だった」と主張したと言う。

もちろんいくつかの前提条件と修飾語のついた発言である。韓国では反発が強まっているばかりでなく、それを黙って聞いて帰ったトランプ大統領にあきれてもいる。しかし、はたしてトランプの不勉強であろうか。それはむしろ韓国の不勉強だったのではないか。

私が韓国にいた頃、学生たちにしばしば語っていたのは、もしソ連が参戦する前に日本が降伏していたら、あるいは、もし毛沢東と蒋介石が争っていなかったら、「中国は朝鮮を自国領に編入することを強力に主張したはずだ」ということである。

韓国では、朝鮮は常に独立国であったと教えているが、現代の感覚では長期間にわたって、中国の属領であり続けた。習近平主席の話を「ある一時期に、元が高麗を支配したことがある」と軽く理解したのである。だが、む

しる「李氏朝鮮が中国からの勅使に対し、王が王都の郊外まで出向き、自ら三跪九叩頭の礼で迎えていた」ことを想い起すべきである。

「三跪九叩頭の礼」とは、中国皇帝の前で臣下が「跪いて地面に頭を三回つける行為を三回繰り返す礼」のことである。これはもちろん臣下が皇帝に対して行う礼であり、勅使に対して国王が自ら王都の入口まで出向いて行う行為ではない。

清国末期のことになるが英国の外交官も日本の外交官も皇帝の前で「三跪九叩頭の礼」を行うように強要されたが拒否している。

清国の時代には、西藏(チベット)もウイグルも、直轄地としてではなく藩部として現地首長を通じた支配が行われ、伝統的文化の維持が許されていた。それに対して、李氏朝鮮は、名目上は藩部よりも緩い朝貢冊封関係にあったが、実質的には過酷な支配を受けており、自主外交権はなく、毎年、黄金百両、白銀千両の他、牛三千頭、馬三千頭、(美女三千人?)の貢納を要求されるものであった。

いや、つい最近も、韓国の盧英敏駐中大使が中国の習近平国家主席に信任状を奉呈した際、芳名録に「万折必東」と記していたことが問題となっている。

「万折必東」とは荀子の言で「黄河が万回折れ曲がっても必ず東に流れる」の意から諸侯が「天子への忠誠」

を誓う言葉として知られていた。事実、李氏朝鮮の宣祖が壬辰倭乱(文祿・慶長の役)の後、明に送った書で「万折必東、再造藩邦」すなわち天子への忠誠を誓い、藩(朝鮮)を再建してくれたことへの感謝の意を伝えていた。

留意すべきことは、ここでも朝鮮は自らを「藩」として、後のチベットやウイグルと同様に位置づけていたのである。

地理的に見ても、中国の首都北京からソウルまでの距離は、千キロメートル弱で、上海、武漢よりも近く、広州、深圳、東莞、香港などの主要都市までの距離の半分以下で、ましてやチベット自治区、ウイグル自治区は遙かに遠方にある。

中国側のこの認識が、最近の韓国への「三不」要求、すなわち、①米国のミサイル防衛体制に加わらない、②韓米日三カ国軍事同盟に発展させない、③サードの追加配備は検討しない、となって現れている。これでは韓国の自主外交権の完全喪失であるが、外交に未熟な韓国は、交渉経過を曖昧にしてやり過ぎそうとして大失敗した。今や中国は韓国を属国扱いしているかのようである。

一方、超大国の米国は、広大な内陸部を持ちながら、大きく発展したのが海洋国家としてであった。ところが、内陸の州に基盤を持つトランプ大統領が生まれると、内陸超大国の素顔を見せ始めている。まずメキシコとの国

境に壁を建設する。万里の長城ばかりでなく、ローマも周辺民族の侵入に備えてフロンティアに「リメス」という長い防壁を築いた。英国の五〇〇キロメートルにも及ぶハドリアヌス長城もその一種である。

イスラエルも本質的には内陸国家であり、占領地に大がかりな分離壁を設けている。

考えてみれば、周辺を脅かすほどの内陸国家こそが、逆に防壁を築くのに熱心であった。それは中国の歴史に良く現れている。中国は隋、唐を含めて、清に至るまでに漢民族の王朝は宋と明のみで、その他は多かれ少なかれ北方系の征服王朝が続いていた。中国が周辺地を獲得する動機は防衛本能によるところ大なのである。

さて、イギリスのEU離脱（ブレグジット）、スペインのバルセロナの独立宣言、イタリアのヴェネチアの大幅な自治権要求に共通する点は、いずれも海に面し通商により発展してきた歴史を持つ地域であると述べた。

もうひとつの共通点は、経済的に豊かな各地域が、現在その豊かさを十分に還元されていないことに不満を持っていることである。

マクロに見れば、欧州連合EUも内陸的な超大国である。海軍力をもとにして世界に君臨した歴史を持つイギリスにとつては、たとえ民主的な組織とは言え、どうしても内陸超大国とは肌合いが合わず過去の夢を追い勝ち

である。しかしイギリスはもはやEUとは不可分であり、ポピュリズムの行き着くところは、過去の栄光ではあり得ない。

またヴェネチアもバルセロナも十六世紀までは地中海に君臨した強大な海洋都市国家であった。

わずか五平方キロメートルに過ぎないラグーンの小島に、十万人が住むのがやつとのヴェネチアが強大な都市国家であったという誇張のように思われるが、アドリア海の主要港を全て植民地化し、更にはエーゲ海のペロポネソス半島、クレタ島、ロードス島、トルコ領の沿岸諸島まで支配下に置いて、イタリア内にも領地を拡大していたヴェネチアは、東西交易を支配して、トルコにも拮抗できる強国であった。小さな国土のイギリスが、七つの海を支配し超大国であったことを思えばよいであろう。

同じ意味でバルセロナも、イベリア半島、フランス南岸、イタリアの地中海の港を確保し、地中海交易で富を蓄えていた。しかも、地域的にフランス文化の影響を大きく受け、言葉もスペイン語と異なるカタルーニャ語を使い、マドリッドを中心とする内陸のカステイリヤよりも優勢であった。ところが、大航海時代に入って力をつけたカステイリヤが大陸からの富を独占するようになる。マドリッドの支配下に置かれるようになる。その結果、マドリッドの干渉が強まるたびに、バルセロナ

が抵抗する歴史が繰り返されてきている。

ヴェネチアもバルセロナも、大航海時代の始まりと共に通商都市としては没落に向かった。西欧の食生活に不可欠とされた香辛料の東西貿易などで巨額の利益を上げていたのが、喜望峰周りの航路に取って代られたためである。しかし、前代に経済的に繁栄していた地域は、その後、文化的な先進地域として生き残る。今やヴェネチアはもちろん、バルセロナも方格都市やガウディのサクラダ・ファミリア教会などで、世界最大級の観光都市となっている。

このように、イギリス、バルセロナ、ヴェネチアの独立志向は、いずれも内陸的な国家や地域からの独立を目指す共通点がある。しかし過去の夢を見て、その付け根となっている内陸から離脱しようとするポピュリズムは、やはり時代錯誤である。

バルセロナの独立の動きを振り返って見ても、独立を主張する勢力は決して多くなかった。二〇〇六年にスペイン中央政府にカタルーニャ自治憲章を要求するまでは、独立を支持する住民はほぼ二〇パーセントで推移していた。ところがこの自治憲章が、二〇一〇年にスペインの国会と憲法裁判所によって否認されると、独立派の支持率が一気に高まった。ポピュリズムというものはそんなものである。

その一方で、いままでしばしば話題となっていたスペインのバスク独立運動、イギリスの北アイルランドやスコットランド独立運動など、民族主義的な独立運動は、このところ静かである。しかし、その裏で、新たに経済的な理由による独立論がくすぶっている。

フランス国境に接し、緑の山々が連なるバスク地方は周辺と言語が全く異なり、かつては暴力的な独立運動が盛んであった。それが鎮静化したのは、寛容な自主徴税権が認められ、経済的な不満が除かれたからである。最近の調査によれば、独立を望むバスクの住民はわずか十七パーセントに過ぎない。

カタルーニア州(バルセロナ)の本音もバスク方式にあるようだが、なにしろスペイン経済の四分の一を占める地域だけに、中央政府が簡単に同意するはずはない。

また長年イギリスの支配下にあったスコットランドは、北海油田の開発を契機として、スコットランド議会・自治政府の設立を獲得し(一九九九年)、二〇一四年には独立の是非を問う国民投票を行った。しかし民族ナショナリズムに流されることなく反対票が五十五パーセントを占め独立は否定された。ところがこの結果が、北海油田の油価下落による財政難と相まって、かえって独立支持率を高めている。

しかも、イギリスがEUから脱退する中で、スコット

ランドが独立国となり、EUに残留できる希望的な選択も生まれた。次の独立是非を問う国民投票はブレグジットが完了する前に行われる予定であるが、もしスコットランドが独立投票に勝つと、もともと独立志向の強かった北アイルランド、ウエールズも追随するかも知れない。そうなれば英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）の解体である。

一方、独立運動とは逆ではあるが、サウジアラビアに隣接する小半島国カタールが最近サウジアラビア等のアラブ七カ国から断交された。理由はシリア派のイランに対する過度な接近にあるというが、真の狙いは内陸大国のサウジアラビアがカタールをバーレーンのように属国化することにある。サウジアラビアの面積の百分の一、四国ほどのカタールは、今でこそ二〇〇万人の外国人労働者がいて国家らしくなっているが、カタール国籍者はわずかに三〇万人に過ぎない。しかし石油、天然ガスの資源に恵まれ、しかも海に向かって開かれているので、首都ドーハはアラビアの大都市である。内陸国サウジアラビアにとっては、バーレーンと合わせて属領化したいのが地政学的な要求である。

ところで、日本においても独立運動が起きるとしたらどこであろうか。全く非現実的な想定であろうが、歴史的に見て沖縄である。本気ではなくとも「独立」をち

らつかせて、日本政府を揺さぶるかも知れない。

もちろん、沖縄が「独立」を叫んだら喜ぶのは中国である。尖閣諸島はもとより、中国を取り囲む海域の大部分が沖縄県であり、瞬く間に中国の影響下に入るであろう。

考えてみれば、一四二九年に成立した琉球王朝は、一六〇九年に島津藩の実効支配下に入ってから、明国や清国の冊封国であり続け、日清戦争までは清国が領有権を主張していた。中国は、おそらく朝鮮半島と琉球を領有化することを長期的な戦略としているに違いない。

このエッセイを書きながら、バルセロナとヴェネチアのことを想った。いずれも我が人生において思い出深い地である。

バルセロナには三十八年前、技術指導で、巡礼路サンティアゴ・デ・コンポステーラの終着地に近いポンフェラーダに行った時に立ち寄った。たまたまその本社がバルセロナにあり分不相応な歓待を受け、更にはスペイン一周の機会も得た。もう既に観光地として賑わいを見せていたバルセロナの中心路ラ・ランブラ沿いのホテルに宿泊し、お上りさんらしく観光馬車に乗って旧市街を回ったが、旧市街を出てサクラダ・ファミリアまで行くと、実に整然とした方格の都市計画となっていた。十九世紀

中ほどマドリッドの強要により作られた通称「板チョコ」状の都市は、バロセロナ住民の反対にもかかわらず、今ではヨーロッパでも有数な方格都市として機能している。

二度目にバルセロナに行ったのは、十七年前に妻と一緒にツアーに参加した時であった。スペインを一周して最後の宿泊地であったので、比較的に時間の余裕もあり、ラ・ランブラ通りの大道芸をぼかっとして見ていた時、ジプシー三人組のスリに囲まれ、カメラを盗られそうになった。近くにポリスがいたので大声を出すと、一人は逃げたが女性二人が捕まえられた。

ポリスは我々にパトカーに乗れという。あまり英語が通じなかったが、とにかく何か証言を求められるか、あるいは表彰でもしてくれるかと思つて、よろこんで同行した。しかし、警察に着くと様子が異なる。どうやら我々は被害者として、連れて来られたらしい。日本人の被害者が多いらしく、調書への記入も日本語版も用意されていた。

一通りの「取り調べ」が終わってから、証言するため協力したのだから、ホテルまでパトカーで送るように交渉したが、にやにやしていて、タクシーで帰れという。結局、ラチがあかずホテルに戻った。パトカーには片道だけしか乗れなかったのが残念であった。

ヴェネチアの方は、今から四十年ほど前、会社の五十

周年記念の懸賞論文に立場上もあつて応募した。たまたま塩野七生の『海の都の物語』を感激と興奮を持つて読み終えたところであった。海洋大国のヴェネチアが強大国に囲まれる中で、弱小国に徹しきつて守つた地中海の覇者の地位に学んで、我が社の行くべき路を模索してみよう。そう思つて書いたのが『海の都の物語』を下敷きにして書いた懸賞論文で、最優秀論文に選ばれ、賞として五十グラムほどの金杯を得た。

それ以来、何かにつけて、ヴェネチアの歴史について学んでいたが、なかなか訪問する機会がなく、やつと妻と一緒にツアーに参加したのが十年ほど前である。その頃には、輻輳したヴェネチア島の地図がほとんど頭に入つていたほどで、その記憶を確かめて歩くような気分であつたが、リゾ島までの船に乗つてヴェネチアがいかにして浅瀬のラグーンを利用して国を守つたかを実感した。やはり最大の収穫は、サンマルコ寺院の青銅製四頭の馬車を見たことであつた。二、三世紀の頃、ローマで作られたものらしいが、東ローマ帝国の首都イスタンブールにあつたのを第四回十字軍の時(一二〇四年)に、ヴェネチアが奪つてきた戦利品である。どこに行つても歴史的な金属製品を見て歩いていた私にとっては、この等身大の馬車はとにかく感激であつた。